

# いわきの寺院の聖教調査

## ——地域の教養の拠点としての寺院の役割について——

門 屋 温

はじめに

本稿は当地いわきにおいて十七年間にわたって続けてきた寺院の資料調査の報告と論考である。まもなく調査が終了を迎えるにあたって、この調査に参加してくれた学生たちのためにも大学に記録を残しておきたいというのが本稿の執筆動機である。<sup>(1)</sup>

筆者は一九九四年六月よりいわき明星大学に非常勤講師として出講するようになり、週一回いわきの学生たちとの交流を通して、何か大宇と地域とを結ぶような活動ができないものかと考えていた。そこへ一九九八年、大学院時代からの友人である渡辺匡一氏が日本文学科(当時)の助手として着任した。渡辺氏は馬目順一氏の紹介でいわき市文化財審議委員であった郷土史家佐藤孝徳氏<sup>(2)</sup>の知遇を得て共にお寺やお祭りを見て歩き、その中で寺院の聖教調査の話が持ち上がった。佐藤氏はもともと歴史学や民俗学が専門であり、古文書には強くても経典類には不案内であったため、経典類を扱える人間を探していたのではないかと思う。そこで翌一九九九年四月から佐藤氏と渡辺氏、それに

筆者が加わり「福島県地域文化研究会」を立ち上げ、本格的な寺院の聖教調査に取りかかったのである。そのような経緯で筆者は渡辺氏と共に、如来寺(浄土宗)、宝聚院(真言宗)の調査に携わることになった。当初は五年、長くても十年もあれば調査は完了するだろうと考えていたが、後述するようにいろいろな事情もあって結局十七年もかかってしまった。ようやくあと一年で終了する目処がついたこともあり、この際両寺院の聖教調査のあらましとこの調査の意義についてまとめておくことにしたい。

### 一 如来寺と宝聚院

まず最初に、調査対象となった二箇所の寺院の概略について説明しておこう。

浄土宗名越派故本山如来寺<sup>(3)</sup>は、元亨二年(一三二二)名越派第三世高蓮社良山上人(妙観)を開山とする。名越派の名は派祖尊観(一二三九—一三二六)が鎌倉名越の善導寺に住したことによる。尊観の後継者である第二世明心は長野善光寺南大門に住し、教線を維持した。

如来寺はもと大國魂神社の山名氏が建てた寺であったが、名越派第三世妙観（一二九二—一三六一）を招き改めて開山とし、以来、浄土宗名越派総本山と称することとなった。また、名越派の檀林寺院として僧侶たちの教育・育成のための道場となり、ここで学んだ僧侶たちが奥州各地に教線を拡大していった。一五〇〇年頃、如来寺から一キロほどのところにある、妙観の弟子が建立した専称寺<sup>(4)</sup>へ本山が移ったことにより、如来寺は「故本山」と称することとなった。以降、江戸時代を通じて如来寺は、新たに本山となった専称寺、檜葉の成徳寺<sup>(5)</sup>、大沢の円通寺<sup>(6)</sup>と並び、名越派の中核寺院として重要な地位を占めてきた。明治になって政府の宗教政策により浄土宗は一派に統合され、名越派は廃絶、専称寺は「名越派旧本山」と呼ばれるようになった。

如来寺はさきに述べたように檀林寺院であったため、名越派の典籍を中心として重要典籍が数多く残されている。本山が移った際には、多くの重要典籍もまた専称寺に移されたため、それを嘆いた如来寺第十世良懿は、派祖尊観、二世明心、三世妙観の伝書を中心に名越派の秘書を集めて箱に収め「月形の箱」<sup>(7)</sup>と名づけた。「月形の箱」の名は、かつて明心が住した善光寺月形坊に由来する。「月形の箱」の中には、如来寺開山良山妙観の自筆本をはじめとする貴重な写本が多く含まれている。また、いわき出身で、布教のために琉球に渡り『琉球神道記』を著したことで有名な袋中上人良定の自筆本なども伝わる。古いものは室町時代の写本から明治時代の資料まで、全部で2000点余の典籍が所蔵されている。本山専称寺が明治期に衰微荒廃したため、如来寺は名越派の数少ない貴重な資料を所蔵する寺院ということになった。

た。『浄土宗全書』続巻十は「名越叢書」として名越派の聖教を収録しているが、そこには多くの如来寺所蔵典籍が含まれている。ただ、戦後の二度にわたる夏井川の氾濫による水害に遭って傷みの激しいものや、避難のための移動で巻がバラバラになってしまったものもかなり見られ、整理や修復が必要な状態になっていた。我々が調査を開始したときは、そのような状況であった。

もう一方の宝聚院<sup>(8)</sup>は、真言宗智山派の寺院であり、開創は鎌倉時代の建久三年（一一九二）にまで遡るとされる。永正元年（一五〇四）、秀宥が高野山宝性院の性空、醍醐寺行樹院の澄恵から伝法灌頂を受けたことにより宝聚院中古一世と呼ばれ、中興の祖とされる。宝聚院はいわきにおいては薬王寺と並ぶ真言宗の中核寺院であり、こちらもまた僧侶が学問や修行をするための檀林寺院であったため、多くの聖教・典籍類が残されている。さらに、当地の棚倉藩の祈祷寺院としての役割を果たしてもいたために、最盛期にはかなりの寺領を持ち勢力のある寺院であったことがうかがわれる。密教寺院であるため、室町時代末期の写本を含めた経典類の他、伝授の印信類や儀式の次第を記した升形本など、総計一七〇〇点余の貴重な資料を所蔵している。いわきの真言宗の中心であった薬王寺が火災で多くの典籍を失ったため、宝聚院聖教は当地の真言宗状況を知る上でも貴重な資料である言うことができよう。また、後に述べるように、京都や奈良の所謂本山にあたる寺院はもとより、栃木や長野などの寺院とのネットワークがあったことが渡辺氏らの研究<sup>(9)</sup>によってあきらかにされつつある。

現在いわき市では宝聚院の属する真言宗智山派の寺院が他宗派を大きく引き離して一位の数を誇る。それに続く二位が浄土宗と曹洞宗である。如来寺と宝聚院は、残された典籍の数から言っても、歴史的にいわきを代表する寺院であると言ってよいだろう。その両寺の聖教調査に関われたことは誠に幸運だったと言える。

## 二 悉皆調査のプロセス

さて、それでは寺院の聖教調査とは具体的にどのようなことをするのか、ここでそのプロセスについて説明しておこう。こうした文庫の典籍調査の場合、一般的に二種類の調査方法がある。悉皆調査と抜取調査である。悉皆調査とは文字通り所蔵されるすべての資料を調査すること。一方、抜取調査は特に価値のあると思われるもの、あるいは研究テーマに合うものだけを抜き取って調査することである。当然抜取調査の方が手間がかからず効率が良いことは言うまでもない。悉皆調査は作業量が膨大であり、自分に関心がない資料や大して価値がない(と思われる)資料も調査の対象としなければならない。しかし、我々が敢えて悉皆調査を選んだのには理由がある。こうした地域の寺院の調査は自分の研究のためだけにやるわけではない。調査をさせていただく寺院や地域の人たちに対してながしかの貢献をすることも目的であり、「美味しいところだけのつまみ食い」では失礼にあたる。また、これも後で述べるように、自分の研究に役立つものだけを採す調査では、結局宝探しやパズルのピース探しになってしまう。お宝でないも

のや自分のパズルに当てはまらないものは価値がないということになる。それではあまりに傲慢であるし、研究自体の可能性も広がっていない。謙虚にすべての資料に向き合ってこそ、資料自体から新たな研究の可能性が見出せるのではないか。それが、この十七年間の調査を通じてたどり着いたひとつの結論である。したがって、膨大な作業となることは承知の上で、悉皆調査に取り組むことにした。以下、悉皆調査の手順について簡単に説明してゆきたい。

### ① 虫干し

元來和紙は非常に丈夫な素材で、保存状態さえ良ければ軽く千年は持つ。しかし、そんな和紙にも弱点がある。それは湿気と虫と鼠である。本を食べる虫というとすぐ紙魚が思い浮かぶ。古い本のページの間にいる銀色に光る虫であるが、実は本に甚大な被害を及ぼすのは紙魚ではない。古本を食い荒らすのはもっぱらシバンムシの幼虫である。実際、如来寺の虫干しでも、穴だらけの本の中から顔を出すのは白い小さなシバンムシの幼虫であった。また、ネズミは本を齧るのはもちろんであるが、その尿はアルカリ性が強いいためか、本にかかると紙がぼろぼろになってしまう。そこでまずは湿気と虫を取り除くために、屋外にシートを広げて虫干しをするところから始めた。特に如来寺の典籍は、先述したように水害に遭っているところから始めて、虫害のひどいものがあつたので、念入りに虫干しをして虫や虫のフンを掃除する必要があつた。

## ② 仮番号入れ

虫干しが済んだ本には一点ずつ仮番号を書いた半紙の短冊を挟んでゆく。この仮番号はこの後の書誌データを取り整理をする作業をしてゆく際の本の識別番号となる。これはいわきの寺でのケースではないが、仮番号の本からはみ出ている部分をすべて綺麗に鼠に齧り取られたことがある。おそらくは菓の材料にするために柔らかい半紙だけを咬みちぎって行ったのだろう。以来、番号は本から出る端の部分だけではなく、短冊の中程にも書くことにした。こうすれば、たとえ齧り取られても容易に番号を確認することができる。こうしたことも、ひとつひとつ失敗から学んでいったことである。

## ③ 書誌カードの作成

次に特製の書誌カードに書誌データを記録してゆく。記録するデータは、本の寸法、冊数、丁数、表紙の色、装丁といった本の外形に関するデータ、外題、内題、作者、筆者、成立年代などの内容に関するデータである。版本の場合はこれに柱題や扉題、匡郭の寸法、発行書肆名などが加わる。さらに書誌カードの裏面には、版本の場合は刊記、写本の場合は奥書等を記録する。

当初書誌カードは国文学研究資料館が使用しているものをひな形にして作成したが、資料館のカードが主に文芸書を想定して作られているのに対し、寺院の場合は經典や伝授の印信のように特殊なものが多く、使っているうちに色々不都合が出てきて度々改訂を加えた。たとえば表紙や表紙の見返しに金箔を散らすなどの凝った装幀を施すものは寺院の本にはほとんどないと言ってよく、そうした項目は削除さ

れた。また逆に、誰から誰に伝授されたものかなど、仏教書ならではの要素については、新たな項目を追加した。この他、装丁の呼び方や料紙の種類などには様々な説があつて必ずしも統一された基準があるわけではなく、書誌学の専門家ではない我々は調査をしながら勉強してゆくという感じであつた。調査は、参加してくれた学生たちだけでなく、指導する我々にとつても勉強の場であつた。

## ④ 書誌カードの見直し

この調査では当初からいわき明星大学の学生や大学院生がボランティアとして参加してくれた。十七年の間に参加した学生・院生の数は延べ五十人近くにもなる。調査の初心者である学生たちが取ったカードは別の人間の眼で見直す作業が必要で、結局両寺とも二回から三回の見直しをすることとなった。勉強しながら調査を進めてゆく過程で、調査開始当初とは解釈や基準が変わったものもあり、その場合当然初期のカードは見直しや書き直しが必要となる。これも調査期間が大幅に伸びた理由の一つである。

実は学生たちに調査を手伝ってもらうことには、相応のデメリットもある。まず、当然のように毎年メンバーが入れ替わるので経験値がなかなか上昇しない。毎年新たに参加する学生には一からレクチャーをし直さなければならない。書誌カードの取り方や辞書の引き方などのレクチャーを担当する教員はその間作業を進めることができないため、作業の進行は停滞する。学生の学習能力には当然のことながら個人差があつて、数回で要領を呑み込んで覚えてくれる学生もいれば、なにせ生まれて初めて取り組む作業なのでなかなか要領を得ない学生

もいる。要領がわからずに作業の進行が止まるだけならばまだいい。中には疑問点について質問して確認をせず、間違ったやり方で書誌カードを取ってしまう学生もいる。そうすると、カードの見直しやデータ入力の際にひとつひとつ訂正しなければならない。そうなるともう戦力にならないどころか、むしろ手伝わってもらわなかった方がよかったのではないかという場合さえある。しかし、たとえそのようなリスクはあったとしても、原則として学生抜きでやろうとは考えなかった。仕事としてやっているわけではないので、最初から効率や採算は度外視しているということもある。しかし最大の理由は、これは単なる調査ではなく教育の一環でもあるということである。

調査に参加した学生に期待したのは、資料調査のスキルを身につけてもらうことよりも、むしろ郷土にある資料を身近に感じてもらうということである。普通であれば、学部の学生が室町時代の資料を手にとって見られるチャンスなどそうそうあるものではない。この土地で暮らす先祖たちが数百年にわたって守り伝えてきた資料に直接触れることによって、自分たちもまたそれを守って子孫に伝えてゆく責任があるのだと言うことを理解してもらいたい。いわき以外の地域から来ている学生であつてもそれは同じことである。彼らが卒業して、将来それぞれの地元に戻ったとき、自分が住む地域の寺院などに残されている資料を見たとき、それがどういう意味を持つものであるかを理解できることが大事なのである。この調査は学生たちに地域文化の継承ということを、自分の手で感じてもらうための試みでもあるのである。その点は調査を始めたときから今まで揺るがないと言つてよい。最初から学生抜きで調査をしていたら、おそらく半分の時間で済んだ

かもしれない。しかしそれでは単なる仕事としての調査、研究のための調査になってしまう。地域における調査はそれではいけない。この寺院の資料調査という場で学生たちにはいろんなことを学んで欲しいと思うからこそ、最初から学生たちと調査を続けてきたのである。

##### ⑤ データの入力

書誌カードに記されたデータをパソコンの表計算ソフトに入力してゆくのだが、それと同時にバラバラになっている本を寄せてゆく作業をする。たとえば上中下三巻、あるいは十冊で一揃いといった本の場合、調べ物のために一冊だけ抜き出したり、洪水の被害から避難するために移動した際に、本がバラバラに別れてしまうことがある。それがデータ化することによって容易に検索がかけられるようになって、たとえば版本であれば同じ外題や柱題を持つものを抽出することができる。そうやって何点もの本を元通りに寄せることに成功した。中には百年以上も離ればなれになっていたと思われる上巻と下巻の再会や、離ればなれになってからどのような運命をたどって来たのか、一方は激しく傷み、もう一方は綺麗なままという本もあつて、ドラマチックな気分になさせてくれる。また粘葉装の場合、紙を接着している糊が劣化して剥がれてしまいやすく、本自体がバラバラになってしまうことがよくある。粘葉装ではあらかじめそうした事態を想定して、糊付け部分に題名の略称と丁付けが記されていることが多く、そうした情報を手がかりに復元してゆくことになる。また料紙の大きさのデータも復元の手がかりとなる。データを見比べながら、「これとこれはも

とも一つの本では」と推理をして統合してゆく作業は、パソコンなどでは考えられないものである。

#### ⑥ 分類・整理

データ入力が完了したら、今度はそれを分類して並べ直すことになる。分類には基本的に図書館と同じZDの十進分類法を用いるが、当然のことながら仏教の部分が圧倒的であるので、仏教書についてはさらに細かい分類をする必要がある。

分類が完了したら、今度は作業用の仮番号ではなく、管理のための本番号を振ってゆく。我々が関与できるのはここまでで、これから先また何百年かの間お寺の人たちだけでこれらの典籍を管理し維持してゆかなければならない。この本番号はその管理のためのものである。貴重な本が再び散逸したり紛失したりしないように一冊一冊に番号を記したシールを貼り、それと原簿によって蔵書を管理しようというものである。古い貴重な資料にシールを直接貼り付けることには、本を傷める可能性があることから否定的な意見もある。しかし、国宝級のものならばともかく、一般的なお寺に残る本であれば、やはり直接シールを貼ってしまうのが最も扱いやすいと思う。ただし、用紙は中性紙を使い、糊もできるだけ変色や変質を起こしにくいものを用いる。分類し並べ直したデータベースは、お寺の希望次第では文庫目録として出版したり、WEB上に公開したりすることも想定している。

#### ⑦ 文化財の指定と補修

典籍の悉皆調査のプロセスは基本的にこれで終了だが、調査に付随

して行うことがある。それはこれから本を維持保存してゆくために必要な手助けである。

ひとつ目は自治体の文化財指定のためのお手伝いである。典籍が県や市の文化財指定を受けるためには全点数の詳細なリストを提出して文化財審議委員の審査を受けなければならない。調査によって作成したデータベースはそのままりストとして使うことができる。ちなみに現在いわき市指定の有形文化財の中で典籍は三点であるが、内二点が「如来寺蔵典籍」（平成七年指定）と「宝聚院典籍及び印信状」（平成二十一年指定）である。ただし「月形函」は平成七年の指定から漏れていたため、我々の調査にもとづいて平成十五年に歴史資料として改めて文化財指定を受けた。文化財指定を受けておけば、修復の際に補助が出る可能性もある。また、檀家の人たちにとっても「うちのお寺には文化財がある」という誇りを持つてもらえる。典籍は仏像や建物と違って、一般の人にはなかなか価値がわかりづらいものであるだけに、文化財指定は「これらの本は貴重なものである」ということをわかっていただくために有効な手段だと思う。

また、典籍を補修する際にアドバイスすることも求められる重要な役割である。古写本等を補修するには文化財修復のための特殊な技術を持った業者に頼む必要がある。一般的な絵画の掛け軸や書道の條幅を手がける町の経師屋さんの手には負えない。今回の寺院ではないが、特殊な技術を持たない経師屋に頼んだ結果、本を台無しにしまつような修復をされてしまった例もある。古い典籍や古文書の修復技術は次々と新しい手法が考案されてめざましい進歩を遂げている。典籍の状態によってどういった修復方法が適当かということアドバイ

スすることも、調査をするものとしての仕事である。

### 三 寺院の聖教調査の意義

さて、後半はこの地域の寺院の聖教調査の意義についてまとめてみたい。と言っても、これから挙げる内容はひとつひとつが独立した論文になるようなものなので、ここでは項目を箇条書きにして簡単な解説を加えるだけにとどめる。個々の問題については、筆者自身を含め調査に携わった研究者がそれぞれ論文化することになるであろう。<sup>10)</sup>

#### ① 本を介してわかる寺院ネットワーク

人が手で写した本には多くの場合「奥書」がついている。奥書とは、巻末にその本を写した年月日や場所、写した人の名前などを書き留めておくものである。奥書があれば、その本がいつ、どこで、誰によって写されたかがわかる。写した元の本(底本)にも奥書がついていると、その奥書も本文と一緒に写して最後に自分の奥書を書き足すことが多い。そのため、奥書がほとんど書き足されていって、巻末にいくつもの奥書が並んでいることも珍しくない。そうすると、その本がどこでどんな人の手を経て書き写されたのかを知ることができる。写本は印刷と違って一度に大量の複製を作ることができない。甲が写した本を乙が写し、それをまた丙が写すというように、基本的に一対一で伝えられていく。印刷された本と決定的に異なるのは、常に人の手を介して伝えられてゆくことである。つまり、本は人と人の関係や、人の移動を知る手がかりでもある。

如来寺と宝聚院に伝わる写本にも、当然数多くの奥書が記されている。そこからいわきの両寺院が、どこのお寺と関係を持っていたかがわかり、それらをたどってゆくと寺院ネットワークのようなものが浮かび上がってくる。江戸時代に入っていわゆる本山と末寺の関係が強化され、地方寺院は京畿などにある寺院を本山として仰ぐことになる。しかし、その結びつきは現代の本山と末寺の関係に比べると緩やかであって、僧侶たちは本山以外の寺へも学びに行くことができた。地方での僧侶たちの学問や修行の場であった檀林寺院は、たとえてみれば地方の単科大学のようなもので、そこから他の地域にある大学や大学院に学びに行くことは比較的自由であった。僧侶たちは自分が学びたいものがあるところへ学びにゆくことができた。もちろん中世のように禅宗と密教を兼学するというようなことは少なくなっているが、それでも、奥書からは僧侶たちがあちこちへ勉強に出かけて本を写してきただことがわかる。

たとえば如来寺の「月形の箱」に収められた写本の奥書を見ると、『先師良山口筆』には「以前十箇条任相承之旨粗註了以此趣奉授畢／于時正和三年十二月三十日／鎌倉名越善導寺書写也／玄義序題□下口筆事／先師良山口筆畢良天記之／天文九年七月八日迎雲寺書畢」とあって、正和三年(一三一四)に鎌倉名越の善導寺で書写されたものが、天文九年(一五四〇)に常陸国真壁郡の迎雲寺で写されて如来寺へもたらされたことがわかる。また同じく『授手印決答疑問抄』には「本奥言云／嘉曆二年七月十八日申剋善光寺南大門月形／談義所ニテ書写了春

秋五十四半幸浄土門互選四ヶ流／移当流々々述證二尊本意伝書祖師素懐悦哉今度／離生死幸之／於奥州岩城之郡矢野目如来寺談義所書畢／文明十年戊戌十二月十六日執筆良寿」とあつて、嘉暦二年（一二二七）に長野善光寺の月形談義所で書写されたものが、文明十年（一二七八）に如来寺の談義所で転写されたことがわかる。

宝聚院の場合も同様で『水天供』には「慶長十九年〔甲寅〕六月十九日高野山於往生院谷藤之坊書写之／岩城薬王寺末弟北神谷俊良実名最祥」とあつて、薬王寺の俊良が高野山で書写したことがわかるし、『守毎月修様』には「慶安元戊子曆六月吉日／右守ハ重徹上人根来寺ヨリ御下時分尾州大山ニテ／鹿嶋神宮寺ノ別当ヨリ御相伝記／重徹上人示之／覚音房／授与勢怡」とあつて、根来寺の重徹上人が尾張に下向の際、宝聚院の勢怡鹿島神宮寺の別当から相伝したことがわかる。

ここに挙げたのはほんの一例に過ぎないが、これらの奥書を見ただけでも、いわきの僧侶たちが関東関西の様々な寺院へ出かけて、本を写して持ち帰ったことを窺い知ることができる。こうした寺と寺を結ぶネットワークは、如来寺が名越派の総本山であつたことからわかるように、単純に中央対地方というような括りでは捉えきれない多面的な繋がりであつたことが想像できよう。<sup>(11)</sup>

## ② 地方寺院における漢籍の役割

如来寺や宝聚院のような寺の悉皆調査をしていると、漢籍が多く見つかることに驚く。それらは四書五経の類であつたり、漢詩集や音韻関係の書物であつたりするのだが、たとえば如来寺に残された漢籍をざっと挙げてみることにしよう。まず、四書五経関係のものだけでも

次のようなものがある。

詩経集註・書経集註・礼記集註・春秋集註・易经集註・鼈頭中庸・鼈頭論語・鼈頭孟子・毛詩鄭箋・周易折中・春秋左伝年表・音註全文春秋括例始末左伝句読直解・孝経大義・大学章句俗解・大学註・小学句読・七書・四書訓蒙輯疎・困学紀聞・爾雅註疏・老子道德真経

また易占に関するものも少なくない。

古易精義指南・断易天机・易学類篇・諸易引事大全抄・通变八卦掌中指南・大広益新撰八卦鈔診解・八卦指南書・論卦八卦互象・古曆本四柱之法・方鑑精義大成・方鑑類要・方鑑秘伝集

さらに詩文や音韻に関するものとしては次のようなものがある。

魁本大字諸儒箋解古文真宝・古文真宝後集合解評林・世説新語補鱗・寒山詩・歌行詩・樂府古題要解・唐詩選・唐賢七言律詩三体家法・唐詩五言律句三体家法・増註唐賢絶句三体詩法・唐詩訓解・唐宋千家聯珠詩格・三家詩話・月節折楊柳歌・明七子詩解・新刻学字千家詩

増続大広益会玉篇大全・韻鏡開奩・韻鏡字子・韻鏡頓語集・韻鏡易解改正・新校正韻鏡字子・磨光韻鏡・音訓国字格・韻鏡必訣袖中鈔拔萃・唐鑑音註・古今韻会举要・説文韻府群玉・聚分韻略

これらの漢籍の用途はまだ具体的にはよくわかっていないのだが、檀林で学ぶ僧侶たちの教養が仏教だけにとどまらず、儒学や漢詩文など漢籍をも含んだ総合的なものであつたことがうかがえる。<sup>(12)</sup>

### ③ 明治期における寺院の役割

如来寺と宝聚院両寺に所蔵される典籍は、中世・近世のものにとどまらない。明治以降の本も数多く残されている。特に如来寺の鈴木知周上人（一八三八―一九二五）は、それまでの蔵書を整理、修繕したばかりでなく、本人も多くの書籍を購入したり書写したりして、明治から大正にかけての地方寺院の役割をうかがう貴重な手がかりを提供してくれる。知周上人の手元にあったと思われる本は、驚くほど他分野にわたっている。宗教法規等明治政府の宗教政策に関するもの、キリスト教や天理教など他宗を批判するもの、催眠術や妖怪学等オカルトなもの、日清日露戦争期の歴史や地理、教育に関するもの、算数や数学に関するもの、気象や天文学・暦に関するもの、医学や農業に関するもの、その他内外の雑誌記事の書き抜きなどなど。これらは知周上人の個人的な関心の幅広さに由来する部分もあるが、その熱心さを見るにつけ檀家の様々な要求に応えようとする住職としての意識込みのようなものを感じられる。幕末から明治・大正にかけて生きた彼は、名越派が消滅させられたように寺院を取り巻く社会的環境が激変する中で、生き残りをかけて必死だったであろう。旧檀林の住職であれば、地域の知識人としての自負も大きかったに違いない。新しい法律や新しい暦が施行されれば、それを檀家の人たちにわかりやすく説明しなければならぬ。最新の知識を貪欲に吸収しようとするその姿勢には、檀家たちのよき領導役たらんとする住職の使命感を見て取ることができる。<sup>13)</sup>

近年は「葬式仏教」などと揶揄され、都市部では地域コミュニティの崩壊と相まって仏教離れ、寺院離れが進んでいるが、それでもいわ

きのように人的流動性の比較的小さい地域では、寺院の果たす役割はまだまだ決して小さくない。筆者が寺院の聖教調査を通じておつきあいをしているいくつかのお寺の住職さんたちは、地域のよろず相談所、なんでもアドバイザーの役割を担っている。寺院の聖教調査からは、江戸時代から現代まで変わらぬ地域における寺院の役割というものを読みとることができるのである。

#### おわりに

以上、一九九九年以来継続してきたいわきの寺院の聖教調査のあらましについて説明した。こうした聖教調査の目的は、数百年の間、お寺と檀家さんたちが守り伝えてきた貴重な聖教に光を当てて、その価値を改めて理解してもらおうのと同時に、今後さらに数百年守り伝えてゆくための手助けをすることにある。また、若い学生たちに調査に参加してもらおうことによって、過去の長い時間、お寺が地域の教養を担って来たことを知るだけでなく、未来に向かって地域の教養を担う人たちを育てるためのささやかな試みでもある。人文系の学問を軽視する風潮が高まる昨今であるが、これ以上地域の文化を風化させないためには、経済ばかりでなく地域を支えてきた教養の担い手たちにも目を向けることを忘れてはいけないと思う。

最後に、この調査にボランティアで参加してくださった多くの明星大の学生や院生、卒業生、さらには調査をお手伝いくださった他大学の学生や研究者の方々のお名前を記して、感謝の意を捧げたい。ありがとうございました。

芦野雅之・石井克生・上田正孝・榎本康・大村壮一郎・小野一雄・小野史絵・小野麻衣・小野若菜・金澤悦子・上村佳恵子・河内聡子・日下部美紀・小泉智子・後藤学・小松芳徳・小峯和明・斎藤理子・酒井英美・佐々木大・佐藤孝徳・佐藤史江・三瓶美緒・東海林良昌・鈴木陽・鈴木映梨香・鈴木拓也・鈴木悠・鈴木三恵・島崎綾子・島崎圭介・菅原千香子・関克・曾根原理・高橋美紀・玉田典子・土屋順子・富岡真由美・中崎いくみ・永田清顕・中村亮彦・沼能岳人・袴塚瑞子・箱崎昌子・原克昭・半澤健一・平澤卓也・廣川雅子・福島ともえ・藤田琴江・堀江智人・堀川香菜・増井広太郎・宗方麻衣子・村上美紀・村松こずえ・目黒将史・茂垣秋典・森雅俊・森田美琴・山田かおり・山田智子・山手賢太郎・吉田悦子・若松清江・渡辺匡一・渡辺晃也・渡部高史・渡辺智裕・渡辺文久・渡辺昌明・渡辺麻里子（五十音順）

## 注

- (1) 二〇一五年一〇月二十三日～十一月二十一日まで、いわき明星大学図書館1階ロビーにおいて、「いわきのお寺に眠る本たち～如来寺と宝聚院の聖教～」という展覧会を企画、両寺の貴重な資料を展示し、「I お寺の本の調査の進め方、II お寺の本からわかること、III お寺の本のさまざまな形」について概説した。本稿は、展示内容のIとIIについての詳しい解説という性格も持っている。
- (2) 残念なことに我々の頼もしき先達であった佐藤孝徳氏は、二〇一〇年五月に急逝された。いわきの歴史の生き字引とも言うべき佐藤氏がなければ、この調査自体始めることはできなかっただろう。ここによりやく調査の完了を佐藤氏に報告できることがせめてもの恩返しである。
- (3) 正式名は松峯山真戒院如来寺と号し、所在地はいわき市平山崎字矢ノ目である。聖教類を収めた経蔵は、山号をとって「松峯文庫」という。
- (4) 梅福山報恩院専称寺、所在地はいわき市平山崎梅福山。応永二年（一

- 三九五）良就上人による開基。
- (5) 所在地は双葉郡広野町折木字館。
- (6) 大沢山虎溪院円通寺。所在地は栃木県芳賀郡益子町。応永九年（一四〇二）良栄による開基とされる。
- (7) いわき市指定文化財の名称は「月形函」となっているが、ここでは一般的に「月形の箱」と表記しておく。
- (8) 正式名を阿遮羅山宝聚院満龍寺と号し、所在地はいわき市小川町西小川字上ノ谷地である。
- (9) 渡辺匡一「地域寺院と資料学——地域アイデンティティーの確立へ」〔中世文学会編「中世文学研究は日本文化を解明できるか」笠間書院、二〇〇六〕
- (10) 同「仏法紹隆寺覚え書き」〔内陸文化研究〕三号、二〇〇四）など。
- (11) 二〇一五年十二月に仏教文学会例会において、「寺院資料調査から拓く文学研究」と題して、如来寺と宝聚院の調査に携わってきた渡辺匡一・原克昭・目黒将史・河内聡子と門屋によるシンポジウムを開催、いわきを始め各地から多くの来聴者にお越し頂いた。
- (12) 詳しくは前出渡辺氏論文、および同「宝聚院蔵『宝聚院縁起代々略記』紹介・翻刻」〔むろまち〕六、二〇〇二）
- (13) この問題に関しては、河内聡子氏が「明治期地方寺院における説草集の編纂をめぐる」と題して発表を行った。

(かどや あつし／漢文学・日本思想史)